

子ども向け福祉機器とその選び方

障害のある子どもたちが「無邪気に、元気に、快活に、楽しく…」生活するために、福祉機器は重要な役割を果たします。子どもたちの障害の状況に合わせ、様々な場面で福祉機器を活用することができます。

一般的に、低年齢の子どもの移動介護のために、バギー車は人気の高い機器です。成長するにつれて身体も大きくなり活動範囲も広がってきますので、小学生ぐらいからは、介護用の車いすの利用も必要になってくるでしょう。自力で移動できる可能性があるならば早い時期から手動車いすや電動車いすなどを検討することは積極性を引き出すうえでも大切です。

姿勢の保持が困難な子どもたちには、バギー車、車いす、電動車いすにも姿勢保持の工夫を行えば、より操作しやすくなります。

座位保持装置を用いれば家庭で食事をしやすくなったり、ゆっくりテレビを見たり、家族との団欒を楽しむこともできます。さらに養護学校などで学習用に利用することもあります。

長距離の移動や旅行などで自動車が活用される時代になってきましたが、姿勢保持の工夫がなされたカーシートも活躍している機器の一つです。

入浴の際には入浴用の椅子などがあると洗体をする際など、ご家族の負担を軽減することができます。

排泄において、オムツや差込便器などの利用は、子どもたちに精神的な負担を与えることになりかねません。できるだけ排泄用の椅子などを用いてトイレで自立排泄ができるようにしたいものです。

子どもの成長に遊具は不可欠ですし、最近では“テレビゲームを楽しみたい”とか“スポーツをやってみたい”というように、子どもたちの自然な欲求としてニーズが拡大しています。このように少し考えただけでも障害のある子どもたちにとって生活を豊かにし、活動できる世界を広げるうえで福祉機器が有効であることがわかります。

子どもたちが障害の状況に合った機器を手に入れるためには、どうしたら良いのでしょうか。子どもたちが成長して寸法的にも障害の状況も変化することから、まだ既製品としてサイズや種類が少ないのが現状です。それでも年々、国際福祉機器展の傾向をみますと国内で入手できる子ども用の福祉機器が増えてきていることは喜ばしいことです。

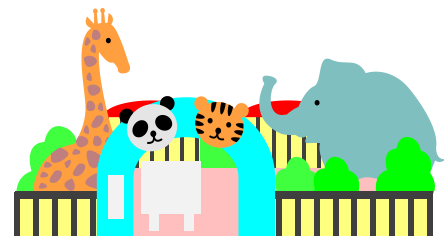
それではいくつかの選択のポイントを考えてみましょう。かっこいいとか可愛いなど見た目で決めることは避けなければなりません。また、お友達が使っていて自分の子にもというのも危険です。自費で購入してしまってから、使えなかったという話も時々聞きます。

リハビリテーションセンターなど専門機関や担当の理学療法士などの専門職と相談して検討しましょう。補装具の製作費に関する公的補助制度もありますので、製作費用の面でソーシャルワーカーに相談することも忘れないようにしましょう。

利用する子どもの障害の状況と、どこでどのように利用するかをよく検討することが、福祉機器を有効に活用するための鍵となってきます。また、決定する前に利用したい場所で試乗して身体との適合や使い勝手を確認することも有効です。最近、デモ機を用意して試乗させてくれる企業も増えてきました。

子どもたちは身体の成長とともに、身体寸法や障害の状況が変化しますので、できるだけ成長に対応できる寸法調節機能のある機器を選択すると良いでしょう。シートの長さ、背もたれの高さ、足を乗せる台の高さなど、身長の変化に対応して調整ができる機種が多く市販されるようになりました。姿勢を保持する部品の位置も、左右上下に調整できるものもあります。バギー車や車いすには、重度の障害に対応しやすいように背もたれがリクライニングするものや、ティルト機構(座と背のなす角度を一定のまま角度調整ができる機構)を装備したものも多くみられるようになりました。

適合についての詳細までは触れられませんが、成長する子どもたちには何よりも「早く入手でき、変化に対応できる」機器の供給が求められます。今後も子ども向け福祉器具として、サイズが変更可能なモジュラー形式のものが増えることや学習用の機器や余暇を楽しむことができレクリエーション機器、スポーツ機器など種類が豊富になっていくことを期待します。



2006年9月

横浜市総合リハビリテーションセンター

企画研究課 研究開発室研究開発室長 飯島 浩